

# ピアス

『最後の戦士達』番外短編三作

作・西山 那々

西山 那々

『最後の戦士達』番外短編三作

目次

ピアス…… P3

明日の行先…… P16

魔法使い…… P28

## ピアス

3

町を歩いていると、よくあるアクセサリを売る小さな露天商に出くわした。

いつもなら素通りだ。声をかけられても、うざ煩いだけ。

しかし彼は小さな露天商の前で立ち止まった。

金色のまっすぐな髪は、短めに切られ、さっぱりした印象を与える。年は十二歳前後だろうか、まだ幼い顔立ちの少年は、その金色の瞳で露天商の商品を眺めた。

「おじさん、これいくら？」

少年は店の店主と思しき男に声をかける。

値段を聞き、その分の金を渡すと、商品を受け取って少年はまた道を歩き出した。

4

「うわっ、ナティ、それ何のつもりですか!？」

帰ってから最初に会った男に大声を出されて、ナティと呼ばれた少年は頭が痛くなった気がした。

「煩いな、ガルイグ。俺に何か変な物でもついてるのか？」

ただでさえ、暑い町の中を歩き回ったせいでくたくたなのに、帰ったら帰ったで大騒ぎされてはかなわない。

いくらこの国が最南に位置しているとはいえ、夏はしっかり暑いのだ。

「変な物と言うか、何ですか、そのピアス」

ガルイグは斜めになった帽子を正しながら、ナティに聞いた。

出かける時にはなかった、ナティの左耳の耳朶みみたぶに、銀色の比較的大きなピアスが光っている。

ナティは髪も短いから、耳が髪で隠れることもない。気づかない方がおかしい

し、妙に思わない方が珍しいだろうと、ガルイグは思った。

「気にするな」

ナティはそう言つて、後は取り合わなかった。

傍目に見ても、ナティとガルイグはかなり歳が離れているのがわかる。実際、ガルイグの方が十歳以上年上だったが、立場は逆で、ナティの方が上だった。ナティはこの町の領主で、ガルイグは家臣の一人ということだ。

「ナティ、耳は痛くないですか？」

ガルイグが心配そうに、しかし明らかに興味津々といった表情で聞いてきた。

ピアスをする者は珍しい。少なくともこの町の近辺では、特にお洒落だとは考えられていないから、穴を開けてまで飾りつけようとは普通思わないだろう。

「第一、ピアスなんて、女がするものでは？」

返事をしないナティに向つて、ガルイグは質問を続けた。

「別に。女だけがしてるわけじゃない」

ナティが返事をしたので、ガルイグはほっとした。返事がなかったのも、何か怒らせるようなことを言ったのではと不安になり始めていたのだ。

「え、ああ。そういえばそうですね。男でもたまにしているのを見かけます。でも、確かピアスって、そもそも……何か願掛けの為じゃないですか？」

ナティの目がガルイグを睨みつけた。

凶星か。

ガルイグは思う。

ナティは何か指摘されて、それが当たっていた時、黙らせる為に睨みつけてくる。しかし自分の主に逆らうわけには行かないから、ガルイグも引き下がるしかなかった。が、

「好きな女性でもできたんですか」

などと、知ったかぶりに余計なことを口走ってしまった。

しまった、と思っても既に遅い。自分の命がここで終わるかもしれない、という恐怖がガルイグを襲う。ナティは見た目の可憐さの割に、短気で実行力がある。

この国は、権力者に仕える者は、権力者の物も同然。権力者が死ぬと言えは死なねばならないし、殺された所で文句は言えない。実際、ナティは彼の気に入らなかった部下を何人かクビにしているし、その気になれば、部下の首を実際に刎ねることもやってのけるだろう。

自分がその第一号になりたくはなかった。

と、色々考えを巡らせていたが、目の前のナティの様子がおかしい。すぐにも飛んでくる予定だった、死刑宣告もない。（「死刑宣告」はガルイグの考えすぎかもしれない。）

頬を赤く染めて俯く少年は、年齢相応の幼さを見せ、佇んでいた。

え？ え？ え？

自分が言ったことを思い出そうとするガルイグ。

——好きな女性でもできた

「うわ。本当だったのか」

つい大声になって、慌てて口を押さえる。

「煩い！ 大体、お前には関係ないだろ」

ナティはガルイグを指差しきっぱり言う、ガルイグを残して自室へ戻った。

殺されなくてよかったとほっとしているガルイグが、その後我に返って一人で

笑い転げたことは、ナティには絶対秘密にしなければならぬ。

やっぱり変だったか？

自室の鏡の前に座って、ナティは自分の顔を眺めた。

いつ見ても女と区別の付かない顔立ちには、ピアスのせいでより一層、女のように

に思えた。

女の方がよくピアスをしている。

それは、願掛けだから。

占いやまじないは、女性の方が好むから。

けれど、ナティはそのまじないとやらに、少しすが縫ぬって見たかった。

俺らしくないか。ピアスの願掛けなんて。

ナティは思ったが、今更ピアスを外す訳にも行かないから、そのまま机の引出しを開け、中に閉まってあったペンダントを取り出した。

汚れた金色の鎖に、金で縁取られた透明な緑の石が付いている。

あのひとに、会いたい。

見たことの無い髪の色。このペンダントの飾りの石のように、綺麗な緑の瞳。

誰にも負けれないと思っていて自分が、あのひとにだけは、屈した。勝負の勝ち

負けではなく、初めて見た瞬間に、すでに打ちのめされていた。同じくらいの年齢なのに、他の大人よりも強かった。

名前がわからなくても、歳がわからなくても、性別さえわからなくても、あのひとへの想いは募るばかり。

そんなばかりなことをやってないで、勉強と仕事をしろ、と言っている真面目な自分が居る。けれど、少しの時間、あの緑の目のひとのことを思っても、良いだろう。

さらに、真面目な自分が、男だったらどうするんだ？ と疑問を投げかけているが、今は無視だ。

多分女の子だった。  
多分。

女の子に間違われるというか、女の子だと信じて疑われないほど可愛い顔の自分、はじめて可愛いと思った相手が、まさか男ということは無いだろう。  
ナティはペンダントをしまった。  
ピアスを付けたばかりの耳が痛む。  
穴を開けてくれた医者、二、三日もしないうちに痛みは引くだろうと言っていた。

あのひとに、会えるのだろうか。

こんなちっぽけな願掛けで、望みが叶うのだろうか。

「せめて、名前聞いておけばよかったな」  
記憶が薄れないように。

再会した時に、確証を得て、喜べるように。

しかし名前など不要だ。名前が分からないからといって、忘れるわけではない。分からないわけではない。年を経て、姿が変わっていたとしても。

そんな不確かな自信がある。

次に二人が再会するのは、四年後になる。

それは、計算された時間、わかっていた未来だったかもしれない。

四年後に、ナティは緑の瞳を見つめる。

無感情な瞳が魅力的に見える理由はわからない。

けれど、その緑の瞳に、自分の姿が映っていることに感動するだろう。

その声が、自分の名を呼ぶことに、喜びを感じるだろう。

ピアスを初めて通した時の痛みのように、じわじわと心を刺す痛みが続いていても。

# 明日の 行先



「どうした、ガルイグ」

ナティセルが言った。

「それは、こっちの台詞ですよ。何を見ていたのですか？」

逆に、ガルイグに聞かれた。

「ああ、これは」

ナティセルは咄嗟に、自分が見ていた物をガルイグの目から遠ざけようとした。安っぽい、ペンダントだ。

このあたりの土地を収めている領主のナティセルが持つような、高価なものはない。

もともと、領主といわれても、知らない者にはピンと来ないだろう。ナティセルは、まだ十五歳だから。

少し長めの金髪を、軽く束ねている。いかにも、利発そうな顔をしている。た

だ、十五歳の少年にしては背も低い方だし、髪を伸ばしているせいかな、ぱっと目は、全くの少女だった。

「なんなんですか？　ひとに見せたからといって、減るものでもないでしょう」

ナティセルの隣に立つ青年、ガルイグは言った。

ガルイグは、ナティセルの家臣。年はナティセルより幾分上だが、それなりに、良き友だった。

「おまえに見られたら、すごく減るような気がする」

ナティセルが、冗談めかして言った。

やれやれ、とガルイグが手を上げて見せる。

「会えると、いいですね」

話を変えるように、ガルイグが言う。

なぜ、知っているのだろう。

ナティセルは少し不信に思ったが、特別ガルイグに対して、隠そうとしていたことでもなかったので、気にしないことにした。

ナティセルの左耳には、銀製のピアスをしてある。

願いが叶うまで。

あまり、男はこういう、まじないめいたことはしないものだが、ナティセルは、何かにすがりたかったのだろうか。

緑の瞳のひと。

未来とは、なんだろう。

決まっていることなのだろうか。

破滅……？

消してしまった記憶。少し、後悔。もう一度会ったとしても、緑の瞳のひとには、ナティセルのことがわからない。いや、どちらにしろ、こんなにも時間が経

つただけだから、記憶を消していなくても、忘れられているかもしれない。

「見るだけだぞ」

そう言っつて、ナティセルは、ガルイグの目の前に、ペンダントを差し出した。

明らかに金鍍金きんめつきの、重さも軽い、ペンダント。トップには、四角くカットした緑の宝石が入っている。

「触るんじゃない。大事な貴い物だから」

手を出したガルイグに向かって、ナティセルは言った。

「ああ、わかりましたよ」

ガルイグは、宝石を見つめている。

彼から見たら、ただの、おもちゃだ。

しかし、精霊が宝石を見ている。もとの持ち主が、ガルイグ達と同じ精霊魔法使いだっただのか、宝石自体が、精霊に近いものなのだろう。

「いいものですね」

「当然だ」

ナティセルは、ペンダントを手元の小物入れに戻した。

「未来はもう見たくないから」

緑の瞳のひとは、ナティセルにそう言った。

二年前。

「怖いから」

怖い、未来。

ナティセルには、そんな未来は見えない。この、緑の瞳のひとのほうが、強い

力を持っているのだろうか。それとも、このひとの、ただの思い込み？

嘘とは思えなかった。

破壊……、だが？ 自分。自分の、せいだ。

だから、怖い。

こんなにも、強い、可憐なひとが、そう言っている。嘘ではない。

「それでは、記憶を消します。それで、未来を見る力のこと、忘れられます」

ナティセルは言った。

緑の瞳の人は、頷いた。

それから、不安そうな目で、ナティセルを見た。

「なに？」

「全部、忘れるのか？」

「いや、忘れるのは、未来を見る力のことだけ」

「そう。なら、いい。でも、」

緑の瞳のひとは、ナティセルに、ペンダントを渡した。

親の形見だそうだ。いや、このひとの父親というひとには会ったから、母親の、  
だろうか。

「お前は、」

ナティセルが、記憶を消そうとしたとき、緑の瞳のひとが言った。

「おんなみたいだな」

強く、なつて。

誰にも、負けないように。

生き残れるように。

未来を 変えてくれ

「ちがー」

否定しようとして、言葉につまる。

なんだろう。

何を見たんだろう。

自分の、未来は、決まっているから。

わからない。

生き残るのは、自分？

違うはずだ。

未来を変えることは簡単そうだ。でも、それが、それこそが――。

緑の瞳のひとは、静かな寝息を立てて眠っていた。

「大丈夫。君が怖がる未来には、しない」

自分は、もう数年もしないうちに、死んでしまうのだろうか？  
未来と引き換えに。

でも、会いたい。もう一度。

「ガルイグ」

ガルイグに声を掛ける。

今、ナティセルは、十五歳。あと、運命の日まで、少し。

具体的な日付は分からないし、具体的に何が起ころのかも知らないけれど、そ

れが、未来というものだ。

「天寿をまつとうすることだけが、正しい生き方でもないよな」

「え？」

ガルイグが何か不服な顔をした。

一瞬、天寿をまつとうできないのが、ナティセルのことのように思えたのだ。

が、ナティセルが言ったのは、多分、彼の母の事だと思いなおし、

「ああ、そうですね。そもそも、生き方に、正しいものもないですよ。満足しながら生きましょう！」

ガルイグは、そう言って、軽く帽子をかぶり直した。

「さあ、もう帰りましょう。セラ姫も、もう来ている時間です」

「ああ、そうだな。また、明日だな」

ナティセルは、歩き出した。何も見つからなかった遺跡を背にして。

「なあ、ナティ、もし俺がこんな惑星じゃなくて生命の星に生まれてたら、もつと普通の生活ができたんだろうな。——今見えている星の中にあるのか？」  
「見えはしないけど、多分あるさ。——ユメ、この闘いが終わったら、二人で生命の星に行こう」

タタカイ ガ オワッタラ  
フタリ デ イノチ ノ ホシ ニ ——

End

## 魔法使い

緩く波立った黄金色が、柔らかく、風に揺られている。  
晴れた空を映すような、青い瞳は、いつも遠くを見ているよう

る。  
小さな泉の周りに、小さな木の家がある。

周りは森で、かなりな年月を掛けて成長したと思われる大木が、そここ

る。  
彼が、「外」からここへ来たのは、二年ほど前のことだった。大國間の戦争で、  
親が死に、行き場を失って、子ども達だけで、町の外の砂漠を彷徨さまよっていた。

戦争のせいで、食料は元から、なかった。しかも、居るのは子どもばかりだか  
ら、砂漠を歩いて国境を越え、別の町へ行けるような余裕は、最初からなかつた

のだ。

一緒に歩いていた友人達は、途中で見失ってしまった。

自分が正しい方角へ進んでいたのか、それとも間違った方角へ向っていたのか  
もわからないまま歩き続けて、辿り着いたのが、このオアシスだった。オアシス  
には、はぐれた友人達も居た。

十三歳で町を出てここに来て、それから二年経ったのだから、彼は、十五歳に  
なっていた。

「イーヴァ、どこに居るのー？」

離れた所から、自分を呼ぶ声が聞こえてきて、彼は声の方へ向き直った。

「こつち！」

大きな声で、答える。

ガサガサと、枝葉を掻き分ける音が近づいてきた。

見下ろすと、濃い焦茶色の頭が見えた。

その頭は、顔を上げてイーヴァを見た、というより、睨みつけた。

「あんたが降りてきなさい！」

茶褐色の肌に、黒い瞳の、イーヴァと同じ年頃の少女だった。

「なんだよ、チエル。お前こそ、このくらい昇って来いよ」

イーヴァはチエルに言い返した。

チエルは、自分が着ている白い綺麗な服と、イーヴァが居る蔦つたの絡まった大きな岩を見比べた。

少し前までは、イーヴァと一緒に外で遊ぶ事が多かったチエルだが、最近は大  
人しくしている。

他の子ども達よりも、少し自分が年上なのだからと、「落ち着いたお姉さん」  
になろうとしているのだ。

「……服が汚れるから、そんなとこ嫌よ」

考えにケリが付いたらしく、チエルはイーヴァに言った。

「どっちにしたって、イーヴァが降りて来ないと駄目なのよ。お祈りの時間だも  
の」

「ええっ、もうそんな時間？」

イーヴァは慌てて、岩から下の茂みへ飛び降りた。

「わっ」

驚いて、チエルは声を上げたが、イーヴァは平気そうだった。

チエルにはできないことを自分ができるのが、イーヴァの自慢だった。

高いところから飛び降りてみたり、岩山に昇ってみたりすることで、チエルに  
男らしいところを見せつけようと思っっているのだが、効果の程は定かではない。  
年下の少年達には、こういうのが人気なのだが。



「もうっ。怖いから止めてよね」

チエルは怒って、先を歩いて行った。

こういう時に、チエルの前を、草を掻き分けながら道を作ってあげるとポイントが高いのだろうか、そこに気付く程、イーヴァは経験豊かではない。

チエルの作った道を後から、追いかけた。

森の中央の泉の周りには、小さな木造の建物が何軒か並んでいる。丸太を重ねて作った家だった。

そのうちの少し大きめにできた一軒に、二人は入った。

既に、中は人で一杯だった。

イーヴァより年下の子ども達も何人も居るが、みんな大人しく座っている。子どもたちは褐色の肌だ。ここに居る子どもは皆、イーヴァと同じ国から逃げてき

た。

他には、ここに昔から居る大人達も居た。大人は数人しかおらず、肌の色もイーヴァ達より白く、イーヴァ達とは全く違う国から来たというのが分かる。

もう全員揃っていた。

少し高くなった床の部分には、長い金髪の女性が居る。彼女が、ここで一番偉い人だと聞かされていた。

子ども達の躰役を引き受けているサプライ達が、彼女を「神子」と呼んでいた。

サプライは自分が小さい頃に死んだ曾祖父くらいの年齢だろうか。そのサプライが「神子」と呼ぶ女性は、イーヴァとそんなに年が離れているようには見えなかった。

神子なら、イーヴァ達も知っている。イーヴァが生まれた国には、キフリの宮というのがあって、そこには神子が居ると聞いていた。

神子は神様の子どもだから、人間じゃないのかもしれない。

壇上の女性が、口を開く。

「戦争で死んでいった人達の為に、祈りを捧げましょう」

透き通った声が、部屋に響く。

膝を床につき、手を合わせて皆で少しの間、黙禱する。

神子は、小さな子どもも居るせいかな、難しい言葉を使うことはほとんどなかった。それでも、何か威厳を感じて、イーヴァは彼女の前では萎縮してしまう。

神子の名前はなんだったろう？

イーヴァは祈りの格好だけで、頭では別なことを考えていた。

皆が神子と呼ぶせいかな、本名を覚えていない。最初に会った時に名乗られたはずだが、歩き疲れて、お腹も減っていて、そんなことを覚える余裕などなかった。そんなことを考えていると、周りから、静かな布の擦れる音が聞こえ始めた。

黙禱の時間が終わって、皆が祈りの姿勢から、元の楽な姿勢に戻し始めたのだ。

イーヴァも皆に習って、姿勢を崩した。

「では、本日の水と食料を渡します。入り口の所にみんな並んでください」

神子が言うのと、ぞろぞろと、子ども達は入り口付近に集まった。

イーヴァもそれに続く。

水差しに入った水と、小麦粉で作った主食、それから、蓋の付いた椀に入った、温かなスープ。

子どもなのだから、誰かから守られて暮らすのは当たり前だ。

そう思っているけど、心苦しい。

小麦や野菜は、大人たちが育てているのだろう。自分も手伝いたいが、元からここに住む大人達に、それを言い出すことがどうしてもできなかった。自分達とは違う、金髪と白い肌の彼らが人間でない別なものに見えて、声を掛けるのを躊躇

踏っているのかもしれない。

神子は神の子どもなのだから。

「ねえ、お昼ご飯が終わったら、スウィートがお話してくれるって」

今年で七歳になる少年が、イーヴァを見上げて嬉しそうに言った。

「よかったな」

イーヴァが答える。

スウィートは盲目の女性だ。普段はあまり見かけないが、子ども達に物語を話して聞かせることがある。誰もが知っている有名な昔話や、わかりやすくした歴史物、そしてこの村の伝説。

「イーヴァ兄ちゃんは、行かないの？」

「うーん。今日はサプライじいさんに聞きたいことがあるから、行かないよ」

「そっかあ」

残念そうな顔で少年が俯くが、すぐに顔を上げて続けた。

「早くご飯食べなきゃ。じゃあ、またね」

少年はイーヴァに手を振って、走って行った。

昼過ぎ、一番自分が懐いているサプライに、イーヴァは声を掛けた。

「僕もそろそろ仕事したいんだ」

サプライは、皺くちゃな顔をイーヴァに向けた。どうやら、笑顔らしい。

「よい心がけじゃ。ふむ。イーヴァに相応しい仕事があればよいが」

サプライは暫し考え込んでいた。

書類の整理をしているスウィートの手伝いがよいだろうか。しかしスウィートは目が見えないから、特殊な方法で書類を整理している。その方法を覚えるのは、大変だろう。それに、若い男を側につけると、ライトデイルフィが文句を言いそ

うだ。

そのライトが担当しているのは、「外」の情報収集と買出しだ。流石に、これは危険だから、イーヴァにやらせるわけにはいかない。

ベナフィットは主に子ども達に一般常識から数学などの勉強までを教えているが、これもイーヴァには無理。いや、それ以前に、あの気難しいベナフィットの側に、そう何時間も一緒に居られる人間は稀だろう。神子の兄のナティセルでさえ、気が滅入っているようであった。

自分は……

サプライは思った。

自分は、格闘技の師範として宮に居たが、この年になって、それを自分に請う者は居なくなっていた。お陰で、現在は皆の健康管理、つまり、食事の献立を考えたりすることが、主な仕事になってしまった。

しかし、イーヴァはこのような地味な仕事は好まないように思える。いかにも「働いている」という感じがするものがよいだろう。

献立を計画するよりは、料理を作る方が向いている、ということだ。

「おぬしには、弓と矢を作る仕事をしてもらおうか」

サプライは言った。

「弓ですか？」

イーヴァが尋ねる。

ここでは、動物の肉を食べた覚えがない。狩など、しているようには思えない。

「重労働だが、イーヴァには丁度よいだろう」

サプライはそう言って、満足そうに頷いた。

イーヴァが心に浮かべた疑問には、当然ながら、答えがなかった。

「そうじゃ。わしが一人で決める訳にもいかんから、神子にも話をしておきなさ

い。わしの紹介だと言えば、断られることはないじゃろて」  
サプライはそう言うと、神子が暮らしている建物へ、目を向けた。  
その後、サプライは他の子どもに呼ばれ、イーヴァの相手をしていられなくな  
ったようなので、イーヴァは一人で、神子の暮らす家へと向った。  
泉の周りの家は、床下が高い。たまに雨が降ると、泉が溢れるからだ。  
それ以外は、自分達が住む家と、なんら変わりはない。  
丸太を組んだ梯子を昇って、開け放たれた扉から、中を伺う。  
薄い布が、遮光の為に扉の内側に掛けられていて、その布が風ではためいてい  
る。

「どうぞ、中へ入ってください」  
家の中から、姿は見えないが、女性の声が聞こえてきた。  
イーヴァは驚きながら、家の中へ入った。

一つ向こうの部屋の扉も風通し重視で開け放たれているが、声の主の姿は、こ  
の場所からは見えない。  
やがて、家の主が姿を現した。  
金髪に、青い瞳。  
白い肌は、ここに住むほかの誰よりも、白い。  
「イーヴァでしたか。何の用ですか」  
名前を呼ばれ、一気に緊張する。

初めて、自分の名前が、彼女の口から紡ぎ出されたことは、奇跡のようだとさ  
え思った。  
イーヴァは頭の中で用意していた、挨拶から弓矢作成の仕事を手伝うことにな  
ったこと、それから最後の挨拶までを、一息に言った。  
彼女は、微笑んでいた。

「わかりました。わたしから、担当の者にも伝えておきましょう。右手側の二軒隣の建物、あそこで、弓矢を作っているのです。明日から、朝の食事が終わったら、あそこへ行ってください」

終始笑顔で、イーヴァに説明をしていく。

「あ、ありがとうございます」

イーヴァは、そう言って、神子の家から外へ出た。

緊張が解けずに、外の眩しさと相俟って、降りの梯子を一段踏み外したが、持ち前の運動神経で乗り切った。

『イーヴァ』

神子の声を思い出す。

少し遠く感じていた神子に名前を呼ばれて、急に近くに行けた気がした。

「イーヴァっ」

元気な甲高い声で、名前を呼ばれた。

チエルだ。イーヴァの方を見て、泉の向こう側で手を振っている。

イーヴァは泉をぐるっと回って、チエルの方へ走った。

「なに？」

「ん？ 別に用とかじゃないよ。用があるときしか、手振っちゃ駄目なの？」

「いや、そういうつもりじゃ……」

イーヴァはチエルと並んで、歩き出した。

チエルの行き先は聞いてないが、方角からして、自分達の家に戻る所だろう。

チエルはよく笑うようになった。

戦争で、家族がいなくなっって、食べ物も無くて、皆が奪い合っって……。あの頃のチエルは、いつも不安そうな、怒ったような顔をしていた。いや、多分、チエルだけではなく、イーヴァも同じような顔をしていたのだろう。

今では、考えられない。

今は、笑つても泣いても怒つても、そのどれもが、幸せだと思えるのだから。

「チエル、俺、明日から弓矢作成することになったんだ」

イーヴァは先ほど決まったことを、自慢気にチエルに話した。

「弓矢？ それって、戦いの道具でしょう。なんでそんなものが必要なの？」

チエルが、訝しげにイーヴァを見た。

その表情を見て、イーヴァは、今までの昂揚した気持ちはどこかへ消えてしまった。

弓矢が、今回の戦争に武器として使われることはなかった。武芸でしか使われないような昔の武器は、現代の大砲には勝てない。

それでも、守る側は、他に武器がなかったから、それらを手にとって戦っていた。

チエルの父母は、弓を持って、死んでいた。

抵抗しなければ、もしかしたら、命は助かっていたかもしれない。

武器がなければ、最初から抵抗しようとせず逃げ、逃げのびることが出来たかもしれない。

「あ、ほら、弓矢って言っても、兎とかの動物を射るようなやつだよ」  
できるだけ明るい声で、イーヴァは言った。

「そうなの？」

不審そうな表情でチエルはイーヴァを見ていたが、イーヴァが言うのだから、と信じることにしたようだ。

普通の会話に戻って、イーヴァはほっとした。

何日か経ったある夜、一緒に居た子どもの一人が、熱を出した。レイヤは今日は朝方から、気分が悪いなどは言っていたが、発熱は唐突だった。ざわめきに、今まで寝ていた子どもも起きて来る。

「大人を呼んでくるよ」

イーヴァは看病しているチエル達にそう言って、家を飛び出した。

泉の場所まではずぐだった。

と、泉の側に、人が立っていた。

白い服に、金の髪。ここに最初から居た大人の姿。

「すいません、レイヤが熱を出してるんです。僕たちだけじゃ、どうしたらいいかわからなくて」

誰か確認せずに、後ろから大声で呼びかけた。

振り返った、白い服の女は、神子だった。

神子は、走ってレイヤの所まで駆けつけてくれた。

「風邪を引いたようね。昨日は突然寒い夜になったものね」

神子はそう言って、水に浸してから絞った厚手の布を、レイヤの額に置いた。

「イーヴァ、ベナフィットを連れてきてください。神子が呼んできると言えば、彼女はすぐにでも飛び起きますから」

また、名前を呼ばれ、イーヴァは嬉しくなった。

「はい」

返事をして、また家から出る。今度は、ベナフィットが住む家へ向った。

ベナフィットを連れて戻ってくると、レイヤの枕もとで、神子が囁いていた。

「少し、気分がよくなる魔法をかけます」

神子はそう言うと、何かを呟きはじめた。



魔法は、確かに効いたようで、レイヤは正しい息遣いで眠り始めた。ずっと、おまじないの一種だと思っていた「魔法」を目の当たりにして、イーヴァは息を呑んだ。

神子の魔法を受けたのが自分でなくて、少し残念な気がした。

「ベナフィットに薬を作ってもらいましょう。レイヤが目を覚ましたら、何か食べさせてあげて、それから、薬をあげてください」

神子はそう言うと、子ども達が住む家から、外へと出て行った。

ベナフィットは、じろり、と子ども達を見回すと

「はいはい、みんなはもう寝ましようね。レイヤの看病は私がするから、子どもは良く寝て、よく食べる！それが仕事よ」

と言った。

すぐに怒るし、あんまり優しいと思った事は無かったが、本当は結構良い人な

んだと、イーヴァは思った。

寝ろ、とベナフィットに言われたが、イーヴァは外へもう一度出た。

神子にもお礼を言いたくて、泉へ向った。

しかし、泉には神子は居なかった。

神子の住まいには、まだ人が居る気配がない。

どこだろう？

単に神子にお礼を言いたくて、イーヴァは辺りを探し始めた。

甘い香りが立ち込める、薔薇園に、イーヴァは辿り着いた。初めて来たわけではないが、夜に来ると、随分と雰囲気違っていて驚く。

神子が、薔薇の中に居た。

月明かりが彼女を照らし、風が吹くと、水を被ったような彼女の髪は煌めいていた。

「神子」

イーヴァは少し離れた所から、彼女に声をかけた。

あまり近づくと、失礼だと思ったからだ。

けれど彼女は、空に目を向けたまま、イーヴァには気付かないようだった。

仕方なく、イーヴァはもう少し、神子に近づいて、再度声をかけた。

「神子」

「わたしを、名前で呼んでくれますか？」

神子が言った。

まさか、自分が名前を覚えていないことを知っていて、そんな意地の悪いことを言うのだろうか。

イーヴァは思うが、神子の真剣な顔を見て、また、緊張してしまった。

「イーヴァですね。わたしは、シユラインと申します。ウイケッド王家の長女。

この世を救ったナティセルの妹」

神子が言った。

「物語を、覚えていますか？ スウィートが、貴方達が来た時に、教えた物語を」

ああ。

イーヴァは思い出した。

スウィートが、この小さなオアシスの伝説だと、教えてくれた話。

二人の戦士と、二人の魔法使い、それから月の神子の、冒険物語。最後に悪を倒して終わる、典型的な英雄物語。

「伝説になるほど、昔のことではないのよ」

神子は、また空を見上げた。

「シユライン？」

名前を、反復して、イーヴァは言った。名前を確認しただけだったが、シユラ

インはイーヴァを振り返って微笑んだ。

「ありがとう、イーヴァ」

いつもの、憂いのある微笑ではなくて、屈託のない微笑みに、イーヴァの胸が高鳴る。

「あなたの声は、あの人に似ているわ。そうね、スウィートの話で言うと、魔法使いの一人ね」

でも、スウィートの話では、魔法使いは、魔法使い同士で幸せに暮らした、と  
なっていた。

シユラインは、話の中に出てきていただろうか。

「イーヴァ、空を見て。わたしは、夜の空が好き。宇宙が、見えているんだもの」  
あの人、まだこの宇宙のどこかで、生きている。

シユラインの白い肌に、月明かりが反射して、姿が浮かび上がる。

そのまま、飛び立っていきそうなくらいに。

「スウィートの話には、出てこなかったでしょう。魔法使いに恋した、ただの町娘」

シユラインが笑った。

白い歯が覗いて、これまでの彼女とは違った魅力が現われる。

空を見て、と言われたが、イーヴァの目はシユラインに向けられて、他のものを見る余裕がなかった。

「イーヴァ！」

後ろから、甲高い声が自分を呼んだので、流石にイーヴァは振り返った。

「チエル……」

「うわあつ。神子さま！ すいません。イーヴァが邪魔しましたか？」

あたふたと、妙なジェスチャーで、チエルは謝っている。

邪魔したのはチエルだろ？

と思いつつ、イーヴァは神子に向き直った。

「シユラインさま、今日はありがとうございます」

いくらなんでも呼び捨てにすることはできず、イーヴァは礼を言った。

「……おやすみなさい」

シユラインはいつものように微笑んで、挨拶を囁いた。

チエルに引っ張られるようにして、イーヴァは薔薇園を後にした。

『魔法使いに恋した、ただの町娘——』

シユラインの言葉。

その言葉は、ずっと、イーヴァの心に引っかかっていた。

スウィートの話には登場しなかった。それは、シユラインのことなのだろう。

けれど、誰に聞ける訳でもない。

チエルには聞いてみたが、当然、知らない、と答えられた。

とりあえずは、翌日から、イーヴァは弓矢作成の傍ら、ライトデイルファイから魔法を学んでみる事にした。

魔法使いになれば良いってもんじゃないことくらいは、分かる。

それでも、シユラインの為に、何かしてあげたかった。

声が似ていて、名前を呼んで欲しいのなら、いくらでも呼んであげたい。居なくなつた魔法使いの変わりに、自分になれるのなら、何でもできる。

いつか、本当に大人になったら、魔法使いの代わりではなくて、イーヴァ自身

として、必要として欲しいと思つて。

西山 那々 (Nana Nishiyama)

Web: <http://www12.big.or.jp/~tororo/novel/>

Mail: [tororo@big.or.jp](mailto:tororo@big.or.jp)

作成日: 2005/05/09    更新日: 2005/05/09

End